

平成 19 年度卒業設計優秀作品の選定経過と講評

大阪市立大学工学部建築学科 2008 年 03 月 24 日

1. はじめに

平成 19 年度卒業設計作品は 2 月 18 日（月）正午を締め切りとして提出された。同月 20 日午前中に建築学科教員による学科内判定会議をおこなった。同日午後より、学内外委員による卒業設計優秀作品選定委員会を公開で工学部中講義室において行った。その経過をまとめておく。

2. 卒業設計優秀作品選定委員会

2-1. 学内判定会議

選定対象は合計 23 作品であった。学内判定会議においては、各教員による成績判定を集計して、各学生の可否を確認するのが主な役割である。その集計の単純な平均によって本年度は 7 名の「優秀作品候補」が決定された。これはあくまでも目安程度のものであり、学外の選定委員が推薦作品をピックアップするときの参考のために作品表紙に「候補」である旨を記されるだけである。「候補」以外の作品がピックアップされることも多々ある。

2-2. 卒業設計優秀作品選定委員会の構成

卒業設計優秀作品選定委員会は、先にもふれたように非常勤講師を中心とした学外委員と、学科内から選抜された教員によって執り行われるものである。各自持ち点を 6 点として、3 つ以内の推薦作品をピックアップして持ち点を自由裁量で配分する形式をとっている。選定委員には公開審査会に先立って製図室にて展示している全作品を見てもらい、推薦作品のピックアップと配点を依頼した。本年度選定委員は以下の通りである。

これら委員のいずれかによって推薦作品としてピックアップされた作品を、公開での優秀作品選定委員会における審査対象とした。今年度は表1のように9作品が選定対象に上った。また運営に建築学科4、3、2回生、修士数名が協力した。記して謝意とする。

学内委員

谷口与史也（建築構造分野）
木内 龍彦（建築防災分野）
梅宮 典子（建築環境工学分野）
杉山 茂一（建築計画分野）
藤本 益美（建築計画分野）
徳尾野 徹（建築計画分野）
横山 俊祐（建築デザイン分野・委員長）

学外委員

菅 正太郎（工業製図非常勤講師）
種村 俊昭（設計演習非常勤講師）
宮本 佳明（設計演習非常勤講師）*コメントのみ
山内 靖朗（卒業設計非常勤講師）
阿久津友嗣（設計演習非常勤講師）
本多 友常（設計演習非常勤講師）
木村よしひろ（設計演習非常勤講師）
幸家 大郎（設計演習非常勤講師）
三谷 幸司（建築会推薦）
松本 明（建築家）

3. 選定の経緯と講評

本建築学科では優秀作品選定のプロセスをすべての学生に公開する。優秀とされる作品が、学内・学外の選定委員によっていかに論理づけられ決定されていくのかを見ることはスリリングであり、教育効果も極めて高い。

3-1. 公開選定委員会の流れ

表1 得点集計表

	菅	種村	宮本	山内	阿久津	本多	木村	幸家	三谷	松本	横山	杉山	徳尾野	藤本	梅宮	谷口与	木内	計	順位
瀬見 理絵		2	○	②	2	③	②		③	③	3							20	1
齋藤 優子		③		3			3	②	1.5				1	2			3	18.5	2
吉川 敬子		1		1	2	1			1.5	3					2		2	13.5	3
松本 佳紀	③				②			2			2	2	1					12	4
大原 洸	2.5							2			1	2						7.5	5
平井 大介														1	2	2	1	6	6
藤野 敦子							1							2				3	7
羽太 義人						2												2	8
清水友紀子													0.5					0.5	9

○印は、トップ4による決選投票において学外委員が一番に推した作品を示す。

公開選定委員会においては、委員長の挨拶後、得票が少なかった作品から順に、図面と模型を前にして投票した委員がその作品をどういった点から推薦するかを述べ、必要に応じ、学生との質疑応答を行った。こうして、9 作品についての審査を進めた結果、最終候補が得点の多い上位 4 作品に絞り込まれた。学内委員より今年度の特徴である都市インフラを対象とする作品の代表として 5 番目の**大原作品**を最終候補に入れてもよいのではという意見もあったが、「的確に設計意図を説明できていれば評価が変わったかもしれないが、質疑応答での説明不足」ということで最終候補から外された。

3-2. 最優秀作品・優秀作品の選定

最終候補に残った 4 作品は大きく 2 つにグルーピングされた。ひとつは斬新な着眼点や迫力ある造形がなされているわけではないが、テーマ設定・製図・模型作成・プレゼンと卒業設計の一連の作業を誠実かつ真面目に取り組んでいるタイプ(「誠実派」)であり、もうひとつは、ユニークな着眼点やストーリー設定あるいはホットな都市問題に果敢にチャレンジする提案重視タイプ(「プログラム派」)である。前者は、衰退する都心商店街の空き店舗跡に児童宿泊体験施設や高齢者施設等をインフィルして小学校・商店街双方の活性化をもくろむ**齊藤作品**、および林業を主産業とする過疎化の進む山村集落に大学を誘致して、既存民家間に木造の新たな木造建築を加えることで活気ある新たな集落形成を図る**吉川作品**が該当する。後者は、住之江区平林の貯木場跡の広大な水面に公営住宅建替え(5 千戸/年)のために継続的に必要となる仮住まいの集落をつくるという**瀬見作品**、および縮減する和歌山市の都心エリアを対象として農業都市へと大胆に改造していく**松本作品**が該当する。いずれの作品も決め手に欠き、議論だけでは 1 作品に絞り込むことができなかつたので、学外委員による決戦投票を行った。その結果(表 1 参照)、建築としての組み立てや造形、揺れに対する技術的対応、周辺市街地とのかかわりなど課題は多々あるが、「卒業設計にはストーリーとそれに対応するプログラムがもっとも大切」ということで、10 名のうち 6 名の学外委員が推すプログラム派の**瀬見作品**を選定した。選定結果に対して学内委員から異論は出なかつたが、本建築学科の評価軸の幅を示すために、対外的なアピール度は低いが誠実派も表彰しておくべきではないか、という意見が出た。検討の結果、**瀬見作品**を最優秀賞、対照的な評価軸の提示ということで誠実派の**齊藤作品**を優秀賞として表彰することにした。

学外への公表としては、日本建築学会主催の「第 49 回全国大学・高専卒業設計展示会」には**瀬見作品**を学科代表として出展することにした。また、日本建築学会近畿支部主催の「卒業設計コンクール」へは、縮減する地方都市への提案としては破綻しているところがあるが、建築造形としてインパクトがある次点の**松本作品**を出品することとした。

4. あとがき

本年度の卒業設計ははっきり言って低調であった。都市問題・郊外問題や農業・林業・漁業等の産業への関心、あるいは高速道路や鉄道など都市インフラへの注目など問題関心の持ち方や方向は悪くはないが、今までになかつた新たな着眼点はみられなかつた。提出された作品をみる限り、問題の表面をなでているだけで掘り下げがまったく見られない。そのようなことではユニークなストーリーや斬新なエンジニアリング的解決策を描くことはできない。この掘り下げ能力は卒業論文を履修する中で培われているはずであり、この点が卒業論文・卒業設計の両者を必修としている本建築学科の特徴である。また、図面表現の画一化も本年度の提出作品で目立った。最低限の内容を確保するために最低限の要求図面を明示しているが、それが目標となってしまっている(計画やデザイン分野の学生においても)。平面・立面・断面図と模型写真だけで複雑な空間構成や三次元空間、あるいは構造や環境などのエンジニアリングシステムを表現しきれぬわけがなく、要求されなくともアイソメ図、模式図、スケッチ、断面パース、構造図、環境システム図、組み立て図などが付加されるはずである。今後の奮起を期待する。卒業設計の運営方法も再検討の時期にきている。

(文責 建築計画 徳尾野徹)

本年度の担当指導員は、谷口与史也(構造)、梅宮典子(環境)、徳尾野徹(計画)

以上